

真白き魔導聖女

下巻（体験版）

作：@1039

■登場人物

ユア・サリスティアス

11歳。真白き聖女と呼ばれ、民衆から絶大な信頼と賞賛を受けている幼き少女司祭。3歳のころから不思議な力を持っていると言われ、孤児院で育っていたのをグループによって教団へと引き取られた。

長い黒髪は常にしつとりと煌き、透き通るように白い肌と美しいコントラストを描く。真っ白な法衣をまとい、同色の手袋と革靴を履いている。他の司祭と同じく神の奇跡を起こす力を持っているが、最近はずか力が出せなくなっている。

マイン・ジエイシツズ

21歳。教団を守る黒竜騎士団の騎士隊長。優れた知性、指揮能力、群を抜く剣技で若くして隊長となり、ゆくゆくは騎士団長になると目されている。しかし、教団の内部を知る内に懐疑心を抱き、廃棄層のレジスタンスと関係を持つようになる。

サラサラとした金髪、青い眼でいかにも二枚目といった風貌だが、屈強な身体を特殊な金属と技術で作られた全身鎧で覆っているため、顔以外の露出部分がない。日に焼けることはないため肌は白い。

アクセル・ベインリーグ

29歳。レジスタンスの屈強な戦士。戦闘能力もさることながら、判断力や戦術眼もあるので特殊な単独任務も任される。

2メートル近い巨体を剛毛が覆っている。重たい鎧などは好まないため、普段は濃紺のつなぎを着て、厚底のブーツと皮手袋をしていて、作業員のようにも見える。髪は茶色で短く刈っていて、無精ひげを生やしている。

フロウ・レンスファイア

18歳。銀髪の女豹の異名をとるレジスタンスの若き女戦士。10歳の時、両親を教団に殺され、廃棄層に逃げ込んだところをアクセルに拾われる。以来、アクセルの部下として共に戦い、今ではアクセルの片腕として働いている。ナイフとウィップを巧みに操る。

長い銀髪を黒いリボンでポニーテールにしている。黒い革のジャンパーとミニスカートを着用。ジャンパーのジツパーをいつも下ろしている。ノーブラの胸元を大胆に見せている。10歳の頃からアクセルに散々嬲られているせいか、Fカップの巨乳になっているので窮屈だかららしい。ミニスカートには大きなスリットが入っていて、黒い網タイツを履いた腿が覗く。黒いロングブーツを履いた脚は細く引き締まっている。

パルマー・ジエンカルハツド

58歳。妻子も両親も教団に殺され、瀕死の重傷を負って地下で目を覚ます。だが、復讐の決意を生きる糧にして、三十年以上もかけてレジスタンスを築き、戦い続け、そして、魔導潜水艦の伝説を発見した。

逞しい体つきだが、無数の傷跡が残っている。年寄りも老いた風貌で、白い長髪と長い髭。硬い皺で覆われた厳しい顔つき。だが、燃えるような怒れる意志の向こうに優しさを持っている。

グルーム・デルキアコシス

80歳。カテドラルを支配する教団の長である大司教。幼少の頃のユアを見出し、実の孫のように大切に育ててきた。また、独善的な教団の体質も変えようと奮闘していた。

しかし、外海よりやってきた魔導士ドウムを側に置くようになってからは人格が変わったような独裁者となり、ユアにも毒牙を向ける。背も高いが、分厚い脂肪も身に着けていて、たるんだ腹を抱えるようにして歩くほど。長いひげと深い皺のせいで顔の表情は見えにくい。

ダウデイ・シエンバリアン

52歳。人格が変わってからのグルームに取り入った腰ぎんちゃくのような男。司教の地位を利用して、私欲を満たしている。ねずみのような顔をしていて、喋り方もいやらしい。ただ、若い頃は潔癖な性格で強力な奇跡の力を持っていた。その後、任地で若い娘から嫌がらせを受けたせいで性格がねじまがつたらしい。

ドウム・オグノオルド

?歳。外海よりカテドラルにやってきた謎の多い男。失われた魔導の力を持っており、神殿の中で魔導生物を作る研究をしている。教団には代々魔導の力を持つ魔導士が外海より招聘されている。

黒いへびの革で編んだマントをはおり、その下に魔導の力で強化した筋骨隆々の身体を隠している。

「きゃあ！」

前方からのユアの悲鳴にフロウははっとして、走り出す。

「ユア！」

だが、角を曲がったところには、ユアはもういない。足下には、懐中電灯が落ちている。銀髪の女戦士は辺りを警戒しながら、そっとそれを持ち上げる。そこは、通路より少し広くなったドーム状の空間で、十メートルほど先に奥に通じる道がある。だが、ユアの姿は見えない。

「ユア！ どこにいったの？」

ポニーテールを揺らす女戦士の呼び声に応えるような振動が、足下から起こる。フロウは恐る恐る足下に光を向ける。

「これは……」

その足下は岩ではなく、でこぼこした柔らかいもので覆われていたのだ。緑や紫、赤色などが混じり、それはまるで毒々しい花の蕾がびっしりと敷き詰められているようにも見える。フロウは、それが何かを知っている。ずっと以前にデータベースで見た記憶がある。おとぎ話の産物だと思っていたが、気づいてみれば自分の足下にそれはある。

「陥穽花……」

陥穽花は、洞窟などの暗い場所にあり、真上を歩く動物を取り込み、雄花と雌花がそれぞれ花粉を植えつける。その獲物同士の間接接触によって受粉が行われるらしい。獲物を傷つけることはないが、陥穽花にかかった人間が、筆舌に尽くしがたい経験をすることも銀髪の美女は身体が熱くなるほど知っている。

「こんなところに、ほんとにあっただ。まさか、ユア……この下に落ちちゃった？」

エナメル調のブーツの爪先を動かすと、蕾の一つが、ぱつと大きく口を広げる。飛びずさって後ろに着地するが、そこも巨大な蕾の上だった。急に足下がなくなり、花の中へと落ちていってしまう。

「いたた……これが、陥穽花の名前の由来ってわけ？」

落ちたときにぶつけた尻をさすりながら起きあがろうとする。しかし、花はすでに天井を閉ざし、閉じこめられたようだった。その空間は真っ暗ではなく、花が発しているらしい赤い光と甘い香りで、異様な雰囲気なたたえている。広さは大きなバスタブほどだが、それよりも狭く感じる。足元には柔らかいロープのような物が敷き詰められているが、それらが蛇のように鎌首をもたげているからだ。

（これって……この花の雄しべ……ってことは、これが……）

周りを取り囲むのは、先端にいぼいぼのコブが付いた触手のような雄しべ。それが無数にいて、獲物の様子を伺っている。背すじに冷たいものが走り、ごくりと生唾を飲み込む。

「ちよつと、ここから出さないよお！ 植物の分際であたしを食べようなんて、百年早いわよ！」

固く閉ざされた口を広げようと手をかける。しかし、足下をうごめく触手のような雄しべが伸びてきて、引き締まった腕や足を絡め取る。雄しべはぬるぬるとした樹液らしいもので覆われていて、身体にそれを塗りたいくらいだと手足が滑って立っていることもままならない。

「きゃー！ ちよ、ちよつと、やめてよ！」

しかし、遠慮のない陥穽花の雄しべは、構うことなく女戦士の服の中にまで潜り込み、彼女の敏感な部分を探し出す。彼女が見たデータベースは極めて控えめな表現をしていたのだが、かつてない経験というのは、尋常ではない快楽のことなのだ。それを夢想して指戯に浸ったことはあっても、実際に経験するというのは大いに抵抗がある。

「あう！ ……はあ……ちよ……やめて……つて……ああん」

息が荒くなり、次第に抵抗できなくなっていく。強化セラミック製の網タイツや手袋の上から巻き付いた雄しべの分泌液が皮膚にしみこむと、身体の奥底から全身が熱くなってくる。そして、もっとも熱くなっている女の中心部に雄しべが群がり、スーツの上からそこを摩擦する。

「ひゃう……くはあ……や、いやあ……あうう……はあ……」

雄しべが器用にベストを脱がし、ベルトを引き抜く。ヌルヌルとブーツも脱げてしまう。薄手のボディースーツとタイツや手袋だけの格好にされると、その上から肌を優しく愛撫するようになでてる。すでに樹液の染み込んだスーツは半分透けるようになって、豊富な乳房の上でしこり立ってしまったちよつと大粒の乳首や、薄い茂みまで見えている。

「あうう……は、花のわりには……うう……上手いのね……あはあ」

大きなバストを触手がからめとり、渦を巻いて絞り込むような人間にはできないような揉み方をする。粘液で湿った雄しべが乳首をこすると、女戦士の背筋に電撃のように快楽が駆け上る。

「はっあはあ……ふうん……あん、すご、あああ……いひい……」

きゅっきゅつと乳首を擦り、押し込んだり、雄しべ同士で挟み込んで摘みあげるようにするなど、驚くほど多彩な技で責め立てられてしまう。幼い頃からアックスとのプレイで経験を積んだ彼女ですら骨抜きにするほどのテクニクに、銀髪の巨乳美女は女戦士としての気高さを捨てたように乱れていく。

(やば……こんなことしてる場合じゃないのに。アックスたちが戦ってるっていうのに、あたし……こんなところで……こんな恥ずかしい……で、でも……)

両手両足が持ち上げられ、仰向けで宙に浮くような格好になる。両腕を虜囚のように吊り上げられ、細く引き締まった脚をM字に開脚される屈辱的なポーズ。銀髪の女豹とまで恐れられている女戦士には誇りを引き裂かれるような恥辱だ。

「はんうう……そ、そんなところ……や、めろ……んううっ！」

足の指までピンと伸びる。イボイボの先端が股間を擦りたてるのだ。ボディースーツの上からぶつくり膨れている陰唇を責められると、背筋がびくびく震えたほどの快感が押し寄せる。秘唇だけではない。全身に網のように雄しべが絡みついていく。若く瑞々しい肌がぬめぬめ先端で愛撫されると、銀髪のポニーテールを振り乱して喘ぐ。そのポニーテールにすら雄しべが絡みついて引つ張られると、マゾヒスティックな快楽に襲われる自分に戸惑ってしまう。

「はうう、あう、や……やめ、んうううっ！」

樹液を吸って肌に張り付いているボディースーツに強引に雄しべが潜り込んでくる。チャックの開いた胸元から。そして、脚の付け根から。(は、肌……直接触られたら……ダメ……く、比べ物にならない……)

ボディースーツの下で既にめくれあがっていた秘唇に雄しべがまとわりつく。ねっとりとした肌を舐られるだけでも耐え難い快楽に責められるのに、敏感な粘膜はおぞましいほどに秘悦を運んでくる。

「くあ……まだ、軽くあたるだけ……なのに……あっ、あっ、ちょ、待つて……ひいひいひいっ！」

銀髪の女戦士があられもない悲鳴を上げる。陰唇を雄しべに広げられたのだ。ぬちよりと秘奥から音がして、恥ずかしい女蜜がどぷりとこぼれ落ちる。それを掬った雄しべの先端がいくつも秘唇に当たる。

「ああ、うっ、だ、め……入るのは……中には……」

恥ずべき股間に群がる雄しべを手で押し留めようとしても、身体の自由は完全に奪われている。なのに、髪を引つ張りあげて、恥ずかしく広げられた部分に植物の生殖器が群がっている様を見せつけられる。すでに気高い女戦士は、苦虐の悦びに囚われようとしている。と、愛液の溢れかえる小さな洞窟に一際大きな雄しべが潜り込む。

「きゃううん！」

あまりの刺激に思わずのけぞって叫び声を上げてしまう。入り口をなぶられるだけでも気持ちよかったものが、敏感な女粘膜を容赦なくこ

すり上げてくるのだから、耐えられるものではない。女褻を雄しべの先端のイボイボが抉るたびに、拘束された女戦士の肢体がガクガクと震えてしまふ。

「あう……ひやう……ああん……いい……す、すごい……いい……」

雄しべは休むことなく久しぶりの獲物をいたぶり続ける。尻をこすっていた雄しべがひくひくしている菊門に気づき、ずるずると入り込んでいく。

「ひゃあ……そこ……ちがうってば……ああ……」

だが、溢れ落ちる愛蜜にまみれた雄しべははずると菊蕾の中に潜り込む。そして、直腸と膣内の雄しべが擦れあい、耐えきれない快楽がフロウを襲う。意識がもうろうとし、涎が口から垂れ落ちていく。その涎をすするように雄しべが口に潜り込んでくる。

「ぶふう……んん……うぐう……ぶはあ……や、やめ……うんぐう……」

獲物と化した銀髪の巨乳美女には抗う術もなく、快楽の虜となり、真つ白な深みへと落ちていくしかない。さらにいくつもの雄しべが一度に何本も膣奥に、そして排泄口へと入っていく。子宮口を擦られ、直腸の中も擦られて快楽に悶えるフロウ。植物に自分の秘密の部分を全て舐めるようにして開発されているのだから、恥辱のほどは尋常ではない。さらに、体奥に潜り込む異物に変化が起きる。

「ああ、な、なんなの……中で……膨らんでるのが、はあ、あつ、あああああつ！」

尻奥、子宮口に当たる雄しべの先端がぶくぶくと膨らむ。そして、体奥の秘園に熱い樹液がぶちまけられる。雄しべが破裂するようにフロウの中で花粉を噴出し始めたのだ。

「ひやううっ！ あはあつ！ あ、あああ、や、やめ……中で、出されたら、熱くて……あたしも、あたしもイっちゃうううううっ！」

雄しべは何度も射精するように花粉を噴出し、瑞々しい乙女の体内だけでなく、皮膚にもこすりつける。フロウは、花粉の噴出を膣内や直腸に受けるたびにびくびくと痙攣し、絶頂へと突き上げられてしまふ。

「あつ、あつ、あうう……あ、だ、だめ……もう……あ、ああああああ」

陥穽花は念入りに雄しべを入れ替えては獲物に花粉を植え付けていく。雄しべが秘唇から抜き取られると、愛液に混じって黄色い花粉が流れてくるが、それを押し込んで別の雄しべが侵入してくる。

「ああ……ああ……やめてえ……死ぬう……はううう！ くあ、んあああああんっ！ 死んじやうううっ！ んう、あ、はあああああ……」

フロウは、もはやレジスタンスの女戦士でもなく、慎みのある女でもなく、性の快楽に絡め取られたあわれな獣のようだった。言葉では否定しながらも、花粉を植え付けようとする雄しべの侵入を歓迎するように足を開き、尻を出し、口で奉仕し続ける。色欲の虜となった獲物を閉じ込めた花の中には、花粉と混じった大量の愛液が水たまりのように溜まっていく。

一方、黒髪の聖女は陥穽花の雌花の中に落ちていた。花の中には、雄花と同様に無数の花弁がある。長い舌のようにぬめり、ざらざらしている。花の中に落ちたユアは、真上にフロウが来ていても声を出さずすらすら出来なかった。なぜなら、怪異な花弁が口と言わず、アヌスと言わず、もつとも大事なところでさえも、法衣の中まで容赦なく入り込んで来ていたのだ。高貴な法衣も粘液で濡れたように肌に張りつき、あらゆる姿になつた少女は、小さな身体を異様な植物に数十分の間、延々と翻られ、弄ばれ続けていた。

「やあ……はあ、はあ……あう、あふう……ああん……」

身体一つ入るのが精一杯なくらいに雄花よりも狭い雌花は、なんとも甘い匂いの粘液を分泌し、その匂いが花いっぱいの花弁に蹂躪されている少女の官能を刺激する。ユアの黒髪も粘液にまみれて皮膚にまとわりつく。

「あはあ……やん……そこ、いやあ……んう、あうう……やあん……あ、ああ、ああんっ！」

花の中いっぱいの花弁に取り囲まれ、身動きもとれず、どうすることもできない。今、自分が一体どういう状態なのかも分からず、押し寄せてくる快楽の波にかりうじて耐えている少女は、まさか植物に犯されているなどとは思っていない。

「きゃふう……ひゃん……な、なんなの、これえ？ やだけど……き、もち……いひい」

無数の花弁がくねくねと動き、少女の白い肌を愛撫する。柔らかい毛のようなものがさらさらと肌を撫で、コブのようなものがぶにゅぶにゅと蠢きながら粘液を塗っていく。嫌悪感を催しはするが、ツボを心得た愛撫に身をもたえさせ、甘い嬌声を上げて、それに応える少女の無毛のスリットからは、透明な蜜が溢れ、花弁が自らの蜜と混ぜ合わせようとそこに集まる。

「ひああっ！ な、んで……こんな……感じちゃうんだろ……だめなのに……ああ、んっ……は、恥ずかしいの……」

充血した乳首やクリトリスを花弁の先で突いては弾き、尻や乳房は、平たくなって撫で上げる。狭い膈内には、既にいくつもの花弁が侵入し、変幻自在に蠢き、少女の幼い官能を蹂躪していく。

「ああん……はああ……も、もうダメかも……もう、無理だよ……おかしくなってくよ……」

ユアの意識が限界に達する頃、蠢く花弁を押しわけ、雌花の下から野太いペニスのような形をした雌しべがせり上がってくる。雌しべは愛

液が滴る細い足を伝って、秘裂を目指して昇っていく。ユアは、朦朧とした意識の中で、その不気味な感触に気が付いた。

「あくう……ひん……な、何、何、何？……やだやだやだあ……やめてよお！」

雌しべは愛液の源泉を探し当てると、容赦なく猛烈にそこに突き進んでくる。だが、快楽に溺れかけているとはいえ、ユアにも理性がある。小さなお尻を振り動かして、雌しべの侵入を避ける。

「やあ、やめ、やめてつてばあ！ 来ないで！」

花弁に囲まれながらも小さな脚をばたつかせて雌しべを押しつけようとする。だが、思わず勢いよく脚が飛び出して雌しべを蹴った瞬間だった。

「え？ え、ちよ、やつ、なんなの？ やああつ！」

くねくねと少女の身体を揉みしだしていた花弁が突如として荒々しく動き出し、真っ白な法衣をびりびりと引き破り、代わりに淫猥な拘束具のように花弁が柔肌を絡みとり、微乳を絞り上げ、手足を縛って股間を開かせる。自由を奪われた少女はそそり立つ雌しべの前に跪くしかない。

「も、もうやめて……なんで、こんな恥ずかしい格好させるのお？」

だが、少女の言葉に植物が答えるはずもない。かわりに鎌首をもたげた雌しべが生き物のようにユアの小さな唇を割り開いて暖かな口内へと侵入してくる。

「もう、む、んうう！ うぐ、んぐぐうううつ！」

じゅぼじゅぼと音を立てて聖女の口内が蹂躪される。涎が自らの身体を汚し、粘液と混ざってぬめぬめと肌を撫でていく。身体を縛る花弁はさらに股間の開帳を強制し、高潔なはずの少女を羞恥の渦に落とし込もうとする。

「うう、んむう！ んく、んくうつ、むううつ！」

目じりに涙が浮かぶが、胸を絞るように縛られ、股間をばつくりと開いた恥ずべき格好で奉仕を強要されていると、次第に頭がぼうつとしてきて陶然としたように視界が霞んでいく。植物に調教されているという状況に、ユアのマゾ性がぞくぞく震えるほどに反応してしまっているのだ。

（ああ、も、もうどうにでもして欲しい……もっと恥ずかしくして……）

従順に雌しべに舌を這わせ、自ら大きく口を開けて喉奥まで頬張っていると、じゅぼりと唾液に濡れた剛棒が抜き取られる。ユアの微かな

期待を見透かしたように花弁は狭い空間で、犬のような四つん這いを強制し、恥ずかしいほどに濡れた秘唇を雌しべの先が擦る。と、幼膣がぷくりと口を開き、中から透明な液体が現れる。

じよぼおお……

「ひっ……い、いやああっ！」

思わず小さな身体が強張った。驚くほど大きな音を立てて、擦られた秘唇から幼蜜が滴り落ちたのだ。糸を引く粘液の量は並ではない。それほどまでにユアは無意識で痴態を甘受していたのだと思い知らされてしまう。誰が聞いているわけでもないが、自分自身で余りにも恥ずかしくなかったのだ。

「あ、ああ、私……お花に犯されちゃうのに……恥ずかしいのに……気持ちよくなっちゃうよお……」

穢れた身体で恥ずかしい姿勢をとらされた状態。そして、大事な秘園を両側から花弁に広げられていく。そこへアックスやマインの肉棒のように熱く、硬く、ぬめった雌しべの先端が当たっている。小さな少女の秘裂をぎりぎりまで押し広げ、長大な雌しべが潜り込んでいく。

「ああうう……う、ん……だめ！だめ！これ、太すぎて……し、死んじゃうよお……ああうう……はあん、ひゃん、ああん……」

ぐぼぐぼと音を立てて長大な塊が少女の体内に侵入していく。痛くはないが恐ろしいほどに秘奥が拡張されていく感覚に思わず怯えてしまう。だが、雌しべがリズムカルなピストン運動を開始すると、ユアの身体は敏感な反応を返し始める。すでに何度となく猛烈な陵辱を受け、激しい交合を繰り返したおかげで、その幼さに似合わぬ淫らな性感を備えてしまっていた。そのこともまた少女の幼い被虐心をくすぐっている。

「あん、はあん……くうう……いいい、これ……いいよお……すごいよお……あたま、爆発……しちやいそう……だよお……」

ぐびゆる、ぐびゆると淫らな音が膣内に、陥穽花の中に、そして、少女の頭の中に響き渡る。身体に火がつくような羞恥と快楽が幼い身体を責め苛み、「可愛らしい鳴き声が止まらなくなっている。

「ひゃう、や、ああ、うんっ！あ、ああ、それ、それだめえっ！」

細脚を絡め取る花弁がぐるぐると小さな肢体を回転させ始めたのだ。犬のような四つん這いの姿勢から、空中に吊り下げられた開脚姿勢に移る間、桜色の膣壁がぐりぐりと雌しべにこねくり回されていく。あまりの快楽に黒髪の小さな頭がぐんぐんと揺れ動く。

「ああ、んあああっ！やう、ひゃううっ！いい、あ、うんうっ！」

誰も聞いていないと思うと、自然と声も大きくなっていく。普段は聖女として慎ましく装っている分、歯止めを外すとこんなにも乱れ、浅

ましくなれるのかとユア自身が驚くほどだ。そう思いながらも、空中で小さな腰を精一杯に動かしてより深い結合を植物相手に求めてしまう。
(ああ、私……こ、こんなにいやらしくなって……マ、マインに顔見せられないよ……)

激しく音を立てながら、雌しべはユアの窮屈な膣をかき回し、突き上げる。今や悲鳴に近い嬌声を上げている少女の中で、次第に雌しべが膨れ上がっていく。

「んあ、お、大きく……だめ、これ以上……あ、ああっ！　しよ、植物なのに……まさか、出ちゃうのおっ!？」

そんな怖れも束の間、より太く硬くなっていく巨杭の突き上げに思考が霞んでいき、ユアもまたエクスタシーの高みへと昇りつめていく。もはや小さな膣内はぎゅちりと雌しべで埋まり、溢れる愛蜜はじゅぶじゅぶと隙間から激しくしぶきを立てて飛び散っている。やがて、遂に膨張した雌しべが、膣内に白く濁った粘液と共に花粉を噴出し始めた。

「ひゃああううう……中に……出てるうう……私も……いっちゃうよおおお！」

激しい噴出で子宮口を叩かれながら遂に少女も絶頂へと駆け昇った。小さな身体がガクガクと揺れ、膣内が雌しべの花粉液で満たされていく。感触で何度も快楽に昇りつめる。

「うあ、あああ……ひいんっ！」

恍惚の表情を浮かべながら痙攣するユアを無視して、雌しべは白濁液を流しながら、秘裂から抜けていく。だが、安息の暇などない。秘裂から抜けると今度はアナルへと突き刺さり、直腸へと白濁液を流し込む。

「え、い、いやあつ！　ああっ……も、もうだめだよお！　お尻、お尻いつ！　また、またいっちゃうってばああああ……！」

そして、さらに花粉を獲物に植え付けようと、少女の口に押し入り、白濁液を流し込んでいく。

「うぐう……ぶふうう……んぐんぐう……ぷはあ……はあ、はああ」

白濁液を噴出しきった雌しべが抜け落ちると、ユアの口元から飲みきれなかった液がだらだらと流れだし、膨らみきらない乳房や、細い腰へと垂れ落ちていく。

「ん、はあああ……うぐ、も、もう終わりだよね……でも、どうなるの、まさかずっとここに閉じ込められるの?」

少女の危惧は外れているが、陥穽の陵辱もこれで全てではなかった。むしろ、ようやく受粉の用意が整ったのだ。花卉がユアの身体を離れていくと、足元が急に溶けるように崩れていく。

「きゃうー！」

ピンク色の柔らかい粘膜のようなものの上に、ぽよんと落とされ、濡れた黒髪が粘膜上に広がり落ちる。そこは陥穽花の下に作られた受粉室で、雄花と雌花に花粉を植え付けられた獲物を集めて受粉を確実にさせるための空間。ピンク色の粘膜に囲まれたその空間は、ユアにも分かるほど、淫らで怪しい雰囲気醸し出している。

「ユ、ユア？ 無事だったんだね……大丈夫？」

そこには、雄花の中で陵辱を受け、黄色い花粉と粘液にまみれたフロウの姿があった。ユアは自らも白濁液にまみれたあられもない姿をしていることに気づき、慌てて胸や股間を手で隠す。花卉が解けた今は一糸纏わぬ姿で、かろうじて長い黒髪が肌を覆っている程度なのだ。

「フ、フロウこそ……大丈夫だったの？」

だが、頷きながら近寄ってくるフロウの雰囲気は、普段とは違っている。最も違いの分かる部分に気づいたユアは目を疑って、その部分をまじまじと見つめてしまう。ボディースーツは剥ぎ取られていて、網手袋と網タイツしか身に着けていない美しい大人の女の肢体をさらけ出している女戦士の股間に、男根のようなものがそそり立っているのだ。ユアの視線に気づいたフロウは、ふふっと微笑んだ。

◆この続きは本編をご購入して愉しんでください！